

5 算数が苦手な子どもへの手立ての例

A 要因として、算数障害が考えられるケース

算数の領域別（数と計算 量と測定 図形 数量関係）についての困難状況を分析し、弱い領域について以下のように対応する。
専門機関への相談。
個別対応プランによる対応及び、通級やＴＴ活用による個別対応。

B 要因として、数概念の未熟さがあり、補助手段が必要なケース

おはじき、タイル等の具体物を使った学習
実生活や遊びでの体験を通して、あらゆる感覚器官を動員して概念の理解と定着を図る。

C 要因として、記憶力や視覚認知の課題があり、補助手段が必要なケース

機器の活用（電卓、パソコン等）
タイルや指などの視覚的手がかりを使う。
繰り上がった数を必ず書かせる。
数字が見やすく、桁を揃えやすいように、幅の広いノートを使ったり、枠を引くなどの工夫をする。
図やグラフを大きくする。
色分けして見やすくする。
定規やコンパスをその子にとって使いやすい物を用意する。
図形の形や意味、グラフの読みとり方、作図方法の手順をマニュアル化する。

D 要因として、読みの理解や論理的思考が苦手、補助手段が必要なケース

個の理解レベルを探り問題の内容や提示の仕方を工夫する。
内容は、できるだけ子どもの経験した場面や興味のある物を取り上げる。
問題中の言葉を易しく言い換える。
絵や図の視覚的手がかりを用意する。

E 要因として、記憶に問題があったり、論理的に考えることが苦手、で定理や公式の記憶・理解が困難なケース

公式や単位の成り立ち、仕組みを理解させる。
実際に重さや長さを計測したり、単位変換する体験を通して、理解を促す。